

ユルスナールの『エレクトラ』¹

— 母性とセクシュアリティのはざまで —

鈴木(久田原) 泰 子

はじめに 『エレクトラ』の翻案

ギリシャ悲劇の三大詩人のアイスキュロス、エウリピデス、ソポクレスが各々取り上げたエレクトラという女性は、同じくギリシャ悲劇の英雄の一人であるオイディプスとともに、精神分析学の用語にその名を供している。神話の世界にも登場するトロイア戦争の英雄である父アガメムノンを殺した母クリュタイメストラをエレクトラとオステスの姉弟が殺害するこの家庭内殺人の悲劇は、同様に家族間の悲劇を描くオイディプスの物語と共に、善悪や運命の概念という哲学的な命題や、神と人との関係や神話の解釈に関する問題のみならず、現実社会において今もなお生じている家庭内での人間関係の諸問題など様々な普遍的なテーマを内包しており、多くの人々の関心を引く物語である。

古くはローマ時代のセネカの『アガメムノン』があり、ラシーヌやコルネイユなどの17世紀フランスの劇作家たちもこの悲劇を題材に作品を制作してきているが、とりわけ20世紀前半から中期にかけて欧米の多くの作家による翻案が発表されている。例えばオーストリアの作家フーゴ・フォン・ホーフマンスタールは1903年に戯曲『エレクトラ』を発表している。この作品はソポクレスの作品に基づいたものであるが、リヒャルト・シュトラウスによって1906年から1908年に作曲され、原作者のホーフマンスタール自身が台本を担当したオペラとしても発表されて世界的な成功を博し、劇作品よりもオペラ作品の方が知られるようになり、近年もしばしば上演されている。

また、アメリカの近代劇作家ユージン・オニールによる『喪服の似合うエレクトラ』*Mourning Becomes Electra* (1931年初演)は舞台をニュー・イングランドに移し変えた三部作で、その形式はアイスキュロスの『オレスティア三部作』に負っている。すなわち、父の殺害、子供たちによる母の殺害、その後の子供たちの苦悩という三段階で一つの家庭の年代記として提示している。

フランスの外交官であり、小説家でもあった劇作家ジャン・ジロドゥの『エレクトル』*Électre*はパリのアテネ劇場で1937年5月13日にジューヴェー座によって初公演が行われた。同じくフランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトルはアイスキュロスの『エレクトラ』を基に実存主義をテーマにした処女戯曲『蠅』*Les Mouches*を制作、この作品は1942年に初演された。さらに日本においても、三島由紀夫がアイスキュロスの『エレクトラ』を近代日本に舞台を置き換えた形で翻案し、『熱帯樹』というタイトルで1960年に文学座で初公演が行われた²。映画の分野ではギリシャ人監督のマイケル・カコヤニスによる『エレクトラ』がギリシャの代表的な女優イレーネ・パパスを主演に1962年に制作、発表された。これはエウリピデスの作品に基づいている。

ところで、各作品はどれもギリシャ古典の作品のいずれかの翻案であるが、そのほとんどが男性作家の手によるものであり、女性の作品としての『エレクトラ』は、ほんの数作しかない³。その中にマルグリット・ユルスナールが1940年代にエウリピデスの作品を基に制作した『エレクトラ、あるいは仮面の剥落』がある。1980年にアカデミー・フランセーズの初の女性会員となったユルスナールは、その代表作である『ハドリアヌス帝の回想』や『黒の過程』が示すように、男性の生涯を冷徹な筆致で描くことで知られている。彼女が小説において女性の人生を描くことや女性の立場からの言説を用いたことは一度もなかった。しかし、戯曲においてはこの限りではない⁵。とりわけ、この作品においてはエレクトラと母クリュタイメストラの生々しい声で発せられる女性の心理や感情が豊かに表出している。そこで、本論文ではユルスナールが本作品を通じて表象する女性の特質はどのようなものか、ここでは原典や他の作

品と対比しながらその差異を見極め、女性の視点で描かれたエレクトラの物語を詳細に検討してみたい。

1 古典の『エレクトラ』とユルスナールの『エレクトラ』

ギリシャ古典の三詩人の悲劇において、アイスキュロスの作品は『供養する女たち』、エウリピデスとソポクレスの作品はともに『エレクトラ』というタイトルで知られている⁶。三詩人はエレクトラを始めとする登場人物の配置や舞台背景、エレクトラと弟オレステスとの再会の仕方と確認の方法、母親とその愛人との関係や彼らの殺害の手順、姉弟のその後の状況などにおいてそれぞれ異なった描き方をしており、各々の独自性を見せている⁷。ユルスナールは自作の典拠をエウリピデスの『エレクトラ』としており、状況設定や登場人物をこれに準じている⁸。エウリピデスのエレクトラは、アイスキュロス、ソポクレスの後に書かれたものとされているが、先行する二作品を踏まえて、より独自性が強調されていると考えられる。例えば、エレクトラが母クリュタイメストラとその愛人アイギストスに冷遇され、心身共に苦しい立場におかれているという状況は他の二作品と同様であるが、ここでは彼女は身分違いの貧しい農夫と結婚させられ、城からも追放されてみすばらしい小屋で暮らしているという設定が付加されている。

また、エウリピデス以外の二人の作品では、エレクトラは母の殺害に直接手を下さず、実行するのはオレステス一人である。そもそもギリシャ悲劇においてこの復讐劇の主演はオレステスであった。アイスキュロスではその表題にもエレクトラの名前は使われていない。彼のエレクトラは戯曲の前半に登場するだけで、クライマックスにつながる後半にはまったく姿を見せず、『オレステス三部作』の脇役の一人でしかない。エレクトラの存在感を少し強調したのはまずソポクレスであったが、ここでもエレクトラはまだ明確な人格を表しているわけではなく、どちらかといえば〈感情的な若い女〉としての台詞を与えられているにすぎない。本格的にエレクトラに個性を与えたのは、エウリピデス

であると言えよう。彼の作品には、エレクトラをより屈辱的な立場に置く事により、彼女の怨念をさらに深め、復讐への意思を一層強める必然性を観客に伝えようという配慮が窺える。だからこそエウリピデスのエレクトラは弟とともに刃をかざして二人で力を合わせて母殺しを執行する。ユルスナールが古典三作の中でエウリピデスの作品を選んだ理由も、エレクトラ本人の内面が最もよく描写されており、彼女の性格が最も明確に表現されているためであると思われる。

さて、物語の大枠の状況設定をギリシャ悲劇に借りているものの、その展開と人間関係には当然ながらユルスナール独自の変更が見られる。例えばエウリピデスの作品では、エレクトラの夫には名前が与えられておらず、単にミュケナイ人の農夫とされているが、ここではテオドール Théodore と呼ばれている⁹。素朴な彼はエレクトラを慈しみ、彼女の復讐計画にも協力し、城で庭仕事の手伝いをしながらポーキスのピラデスのもとにいるオレステスとの連絡係をしているという設定で登場する。またオレステスに付き添うピラデスも、エウリピデスの作品ではせりふのない役柄であるが、ここではエレクトラの依頼によりオレステスを匿い、養育するだけでなく、二人の姉弟の間にあって精神的な絆となる重要な役割を担って登場する。

これらの変更以外に、物語の展開において原作とは大きく異なる点が三つあげられる。まず最も顕著な相違点は、母の殺害者である。前述のとおり、アイスキュロスやソポクレスのエレクトラは、弟を言葉で鼓舞して母の殺害を執行させようとするが、彼女自身は実行に加わらず、実際に手を下すのはオレステスひとりである。エウリピデスのエレクトラだけが事実上オレステスの手助けをして、二人で殺害に至る。しかしユルスナールの作品においては、オレステスではなくエレクトラが母を殺害する。彼女は自らの両手を使って単独で母親を絞殺する。弟は殺人の実行には全く関与しないばかりか、その現場にいることもなく隣室で事が終わるのを待っているにすぎない。

またユルスナールは、オレステスの実父をアガメムノンではなく、クリュタ

イメストラの愛人のアイギストスとしている。そうすることでクリュタイメストラのアガメムノン殺しの理由に、不義の息子のオレステスを守るためという必然性を付加している。さらにオレステスは母殺しは果たさなかったが、アイギストスを実父と知った上で殺害する。この設定によって、ユルスナールの作品では実の母を娘が、そして実の父を息子がそれぞれ殺害するという二重の同性の親殺しという独自性が生じることとなった。こうしたオイディプスコンプレックスとエレクトラコンプレックスを共に意識した展開は、当時ヨーロッパの知識人の間で関心を集めていた精神分析学の影響も当然であろうと思われる。

ところで、この戯曲において最も特徴的であるのは、その副題が示すように、エレクトラが自らの目的であるクリュタイメストラとアイギストスの殺害を遂行しようとする過程で、登場人物がそれぞれお互いに欺き合っていた人間関係がだんだんと明らかにされていき、その素顔が見えてくるという構造である。

エレクトラは、決行の直前まで同志として準備に奔走していた夫のテオドールに偽りの決行の時間や場所を指示して彼を計画から除外する。一方エレクトラが同志と信じていたピラデスは、オレステスに愛情を注いでいるが実は同性愛者でアイギストスのスパイである。こうした二重性を帯びた登場人物たちの中心にいるのはエレクトラで、ギリシャ悲劇とは異なり、物語は彼女の言動に焦点化されている。そこで、ここではエレクトラと彼女をとりまく人々との関係性の中でとりわけ親子、姉弟、男女のつながりを検討し、かれらのアイデンティティのよりどころとしての〈セクシュアリティ〉と〈母性〉の表象に注目してみたい。

2 神としての父アガメムノン

さて、ユルスナールの作品では古典と同様にアガメムノンは既に亡き人であり、彼のイメージだけが他の登場人物たちによって語られる。クリュタイメストラにとってのアガメムノンは、我慢のならない夫であった。彼女はエレクトラに「お前のお父さんと言う人は嫌らしい、ただのデブだったわ。単純なバカ

で不潔な乱暴者。お風呂の後でさえ、愛の営みの一時間後の素裸の私の愛人ほども清潔じゃなかった...¹⁰」と言い放つ。

しかし娘のエレクトラは父を理想化し、神と同化したイメージを弟にも抱かせようとする。

エレクトラ：あいつらは神様を殺したのよ。子供たちが理解できる唯一の神様、子供たちが神様のイメージとして想像するままの神様をね。

オレステス：僕はあの人のことをほとんど知らないだけに僕にとってはほんとに人間以上の人だなあ¹¹。

また、エレクトラとオレステスの父への語りかけは、その輪唱する形式からキリスト教の主の祈りを彷彿とさせる¹²。

エレクトラ：お墓にいらっしゃる私たちのお父様...

オレステス：あなたのご意思が遂行されますように...

エレクトラ：あなたの復讐がなされますように...

オレステス：そして私たちの罪をお許してください...

エレクトラ：私たちはあなたを侮辱した者たちを許しませんから¹³。

不在の父を神のように崇める子供たちは彼らからその父＝神を奪った者たちを許すことはできない。父の娘としての役割を果たそうとするエレクトラはたとえそれを同志のピラデスに非難されてもひるむことはない。

ピラデス：僕は予測していたよ。僕たちの悪業と犯罪には決して名声は与えられないだろう。それは皆にかなり不快な驚きをもたらすだろう。君とオレステスとがここで行おうとしていることは、母殺しと呼ばれる行為だ。

エレクトラ：私はそれを正義の行為と呼ぶわ。[...] 黙って。この戦いが純粹なものであると思わせておいて。[...] わたしたちは純粹な人間、正義の人間、後々詩人たちが哀れんでくれることになる、神聖な復讐を手のうちにもっている人間なの¹⁴！

アガ멤ノンを殺害したのはクリュタイメストラとその愛人のアイギストスである。しかし、自らの純粹さを強調するエレクトラの殺意はクリュタイメストラのみに向かっている。ユルスナールの物語ではエレクトラとクリュタイメストラは相対立する立場にあるように見えているが実は二枚の合わせ鏡のように、アイギストスという同じ男性を愛する相似形の母娘であり、彼女の殺意はある意味で自分に向けられた刃でもある¹⁵。次に二人の愛憎関係について対比してみよう。

3 クリュタイメストラ 対立する母と娘

ユルスナールの作品においては、エウリピデスの設定と同様に、エレクトラは子供ができたと偽ってクリュタイメストラを自分の住む小屋におびき寄せている。何も知らずにやってきたクリュタイメストラは、母親となろうとしている娘に対して、同じ女性としての共感をもって「私の娘、エレクトラや」「不憫な子、エレクトラよ」「もうじき生まれるのかい？ 恐いのかい？」¹⁶と優しく呼びかけ、まずは母親らしい心遣いをみせている。しかしユルスナールの描くエレクトラもエウリピデスの場合と同様に、母親に対して同性同士の理解は見せることはない。エウリピデスのエレクトラは言い訳をする母を弾劾し、ユルスナールのエレクトラは久しぶりに会う母に怨恨と嫉妬の感情を噴出させる。

クリュタイメストラ：女なんて、誘惑に弱いものなのさ。わたしは別にそれを否定はしません。しかしそういう下地があるところへ、亭主があらゆるやまちをして、家内をのけものにするとしたら、妻も夫の真似をしたく

なり、別のいい人をもつようになるというものなのよ。それでいて、後から非難の火の手が上がるのは、わたしたち女の上に限られ、そういうことの因をつくった男たちは、悪く言われることもないのだわ¹⁷。

エレクトラ：人妻が、旅に出た夫の不在中に、化粧に憂身をやつしているとしたら、それはよからぬ女であるとして、除籍しなければならないのです。(…)もし殺人の裁きが、死には死をもって報いるというのであれば、わたしやオレステスは、子として父の仇を討つために、あなたのいのちを、おもらいしなければならなくなるでしょう¹⁸ (エウリピデス)

エレクトラ：私を哀れんでいるんでしょ？ おかあさまは自分の娘を哀れんでいるのね。こんな埃っぽい小屋に住んでいて、ぼろ着をまとい、藁布団の上で出産する私を哀れんでいるのね。私のことが恥ずかしいの、おかあさま？その絹のドレスに触らせて。ああ、私はなんて長い間、絹に触ってなかったのかしら。引き裂かれた時に叫びをあげるような絹を¹⁹。(ユルスナール)

冷静に母の非を指摘するエウリピデスのエレクトラに比べると、ユルスナールのエレクトラの言葉は感情的で激しく、徐々に攻撃的になっていく。彼女は、子供より愛人を選び、自分たちから父親を奪ったクリュタイメストラの母親であることよりも女性であることを優先させた生き方をさらに非難し続ける。

エレクトラ：あんたのオレステスへの愛なんて、あんたの愛人への気持ちや復讐心の妨げにはならなかったのよね。あんたはアイギストスと初めて快樂を得た時にはもう私のおとうさまを殺していたのよ²⁰。

激しい口調で母に対する非難や怨恨の情をぶつける娘に対し、クリュタイメストラも徐々に母親としての顔よりも女としての顔を見せ始め、二人の女性と

してのライバル意識がむき出しになる。

クリュタイメストラ：お前が回廊を朝っぱらから行ったり来たりしているのに警戒していてよかったわ。小娘の短すぎるスカートからやせこけた脚を出して、お前はかたくなに目を伏せているくせにアイギストスを探していたわね！お前はどんなにか私の愛人が羨ましかったんだろうねえ！父親の死に涙を流しながら、お前がそのむき出しの肩を嗚咽のたびにふるわせて居間の長椅子にへたへたと倒れ込むことにどれほど画策していたことか、[...] それにお前のヒステリックな嘆きと、小娘のずる賢さでもって！[...] 私は幸せだったわ。田舎百姓の色男と一緒に堆肥に乗っかってるお前には決してわからないほど幸せだったわ²¹。

このように、娘には得られなかった女性としての幸福を誇示し、またセクシュアリティの点でも娘に勝っていることに露骨な優越感を表して、エレクトラのアイギストスへのかなわなかった密かな思慕を暴露、揶揄し、エレクトラの女性としての敗北を次々と暴いていくクリュタイメストラの言葉に逆上したエレクトラは、母に対する憎しみの感情を全開にし、彼女を罵倒し、ありったけの罵詈雑言を浴びせかけながら自らの両手で母の首を絞めるという行為によって母から言葉を奪い、殺害に至っている。

エレクトラ：雌犬！雌牛！雌駱駝！御黙り！こいつは黙るのかしら？お黙り！って言ってるのよ... ああ、あんたのその太い首にしがみついてやるわ。あんたが話せないようにその太ったほったを揺すぶってやるわ... [...] ああ、どうかこの人が黙りますように！私の手で黙らせてやるわ... こいつの言葉を喉に押し戻してやる。こんな言葉、泡のようにつぶれてしまえばいいのに！悪臭がするわ... この人、真っ赤な顔をして私を見ているわ...。ああ、どうかこの人が黙りますように²²！

エレクトラの母殺しは、実は彼女が事前にピラデスに対して主張したような正義の執行が目的ではなく、むしろ個人的な要素、つまり母への同性の女性としての嫉妬によるものであることが明らかになる。ユルスナールは、ここで娘に母親を殺害させることによって、本来のギリシャ悲劇にみられる母と息子との間の愛情の葛藤の問題ではなく、むしろ母と娘との愛憎関係を中心に物語を構築している。というのも、ここでは息子オレステスは母殺しに全く関与していないので、クリュタイメストラが命乞いのために息子に乳房を見せる、ギリシャ悲劇におけるクライマックスの場面は当然のことながらみられない。エレクトラによって首を絞められ、声を封じられたクリュタイメストラは、息子にも娘にも乳房を見せることなく、息を引き取る。

4 オレステス 削除された英雄性

本来ギリシャ悲劇の物語の中では、母殺しの行為は父殺しに対する正義の報復という大義名分を備えていた。愛人とともに夫を殺し、権力を手にした女に対する懲罰として、クリュタイメストラは息子オレステスに殺される。オレステスは自分を産んだ母を本当に殺さねばならないのかと悩みながらも、アポロンの神託に従わねばならないという苦しい立場におかれる。神託通り母を殺害した後も、復讐の女神につきまとわれ、心を病み苦しむことになる。そこに逃れることのできない厳しい宿命を甘受する人間の苦悩と、それに果敢に立ち向かう雄々しさが描かれるのが一つの特徴である。しかし、ユルスナールのオレステスに神託の呪縛はなく、彼に母殺しを強要するのは殺された父の神にも匹敵する強いイメージであり、それを増幅させるエレクトラの怨念である。ここでは「か弱く、折れやすく、繊細な²³」オレステスは自分には母親を殺すことは不可能だと、エレクトラとピュラデスに繰り返し告げている。

オレステス：ここで、この部屋で…僕には絶対出来ない。(…)僕には絶対できないだろう(…)でも、もし彼女を間近で見ってしまったら、やっ

ぱり僕には彼女を殺せないだろう。(…) いずれにせよ僕にナイフやスプーンの使い方を教えてくれた女性を僕には殺せない。(…) 彼女の乳房が問題なのじゃない。…彼女の愛情が問題なのでもない。(…) 子供としての愛情の問題でもない。わかるかい、エレクトラ？…彼女が罪を犯す前からすでに僕は彼女のことが好きじゃなかった。(…) 僕が思い出すのは僕の母親のことじゃなくて、もろもろのこうした楽しかったことや嫌だったことの寄せ集めなんだ²⁴。

さらに彼はエレクトラが母を殺害しているのを〈見ない〉だけでなく、〈聞く〉ことすら拒んでいる。

オレステス：終わったの？すべては片づいた…僕は血は見えていない…でもエレクトラの顔はふけっちゃったなあ…エレクトラ！終わった？母さんは？(…) 僕は何も聞いてない。二人の良く似た女性の声交互に、まるでエレクトラが自分自身をののしってるみたいだったこと以外は。最初の叫び声が聞こえた時に僕は耳をふさいだんだ。でも物音は残っていた²⁵。

英雄としての使命を果たさないオレステスは、しかしながら自己のアイデンティティを確立するために、実の父であるアイギストスを殺害する。アイギストスから自分の本当の父がアガメムノンではなくアイギストスであることを知らされたオレステスは、自分のよりどころを失いかける。神のような存在として自分にのみしかかっていたアガメムノンとの関わりをなくし、突然アイギストスを父ととらえなければならなくなったオレステスは混乱をきたし、その運命を呪詛する。

オレステス：アイギストスの息子…僕は18年間、別人の、赤毛のあご

ひげをたくわえていた、帰郷したときに自宅で喉をかき切られて殺された人の息子だったんだ。僕に復讐を押し付けるこの父のことを憎んでいたから、僕は戦場で命を落とした將軍を腕に抱えている若い兵士のように気力が萎えていたんだ...そして今や僕はアイギストスの息子なんだ...別の誰かに似ることを強要され、その人に似るだけでなく、その人を支え、いや、その人を支えるだけでなく、力づけ、たぶん慰めてあげなければならないんだ。僕が20年後に似ることになるのはこっちの男なんだ...僕は彼の歴史を背負い、僕を彼の思い出に同化していかなければならないんだ...そして僕はそこから決して抜け出すことはできないんだ、このオレステスは²⁶！

オレステスが実父を刺殺するのはこうした精神状態の結果である。アイギストスから父としての愛情を示されるとオレステスは、その絆を断ち切るかのように彼の命を奪う。

アイギストス：お前は私を愛する必要はないんだ。私は私自身のようにお前を愛するだけで全く十分なんだ。

オレステス：離せ！いいか、僕の首に腕を回そうとするんじゃない！僕が息子だから、全部わかっているみたいな様子で僕を見るんじゃない！おい！こら！...これほど心底からお前を殴ることになろうとは思ってもみなかった！

アイギストス：一体何をした？ああ？このナイフは...哀れな子よ...²⁷

二人の父との関わりから逃れ、オレステスはエレクトラに向かって行く。彼は自身のよりどころを姉との関係性の中に見だし、クリュタイメストラとアイギストスの息子ではなく、エレクトラの弟として彼女の庇護を頼り、彼女とピラデスの三人での生を選び取る²⁸。

エレクトラは僕を愛してくれている。姉としてだけでなく、彼女がその代理をしてくれた母親のように...もしまだ僕の中に何か続いていくものがあるとすれば、もし僕の世界の中でまだ杭か棒のように何か堅固で確実なものがあるとすればそれはエレクトラの愛だ。(…) エレクトラ...姉さんの腕、エレクトラ...僕が慣れ親しんだ姉さんの腕...僕を置いて行かないで...僕をおいてあの小舟に乗らないで...ほら、僕たちだけになっちゃったね...もうこの世には僕たち三人だけになっちゃったよ。(…) 僕たちはつながっている。僕たちだけだ...僕たちは自由だ...僕を支えて...来て...姉さんの肩、友達の腕...²⁹

5 母性と父性の行方

こうして母を殺したエレクトラは、父を殺したオレステスとピラデスとの三人の絆に未来の生を託していく。しかしこの関係性は不毛のノンセクシュアルな関係性である。もともと彼女のテオドールとの結婚は夫婦生活の実態を伴わないもので、処女妻であるエレクトラは自身の子供を持っていない。オレステスからは母親の役割を求められている彼女にとって、弟は子供の代理機能を果たしているが、同性愛者のピラデスがエレクトラに抱く愛情は同性間の友情に近いもので、ここにセクシュアルな関係性が生じる可能性はみられない。つまり実際に彼女が自分自身から生み出すのは母殺しの計画以外は何もない。ユルスナールのエレクトラは、彼女に献身的に尽くす夫のテオドールに、オレステスへの母性的な愛情が子供不在による代理の愛にすぎないことを指摘されると、次のように反論する。

エレクトラ：私はオレステスを子供のように愛しているわ³⁰。

テオドール：君がオレステスを子供のように愛しているのは、君のひざの上ののって君の乳房にしゃぶりつく、本当の子供がいらないからだろう³¹。

エレクトラ：あなたは単純ね、お人よしのテオドール。あなたは本当に単純だわ。子供はあなたなのよ。あなたにわからせるためには物事を目の前に突きつけなきゃだめなのね。この殺人計画は私たちの子供じゃなくって？みんなには形がなく、目に見えないけれど、秘密を分かち合い、私の中で揺れ動くのをあなたが耳にする時まで私の心にどんどん重くのしかかる。出産の時のように多分私はそのせいで血にまみれて死んでしまうんじゃないかしら³²？

このように性的関係を結ばない夫と二人で協力して成し遂げる殺人計画こそが自分たちの子供であると言い張るエレクトラには、妊娠は単に母をおびき寄せる口実に過ぎず、現実の自分の子供を持つという意思はない。エレクトラにとって子供のように大切なものは彼女が遂行すべき殺人計画であり、自らのアイデンティティをそこに求めている。母のように女性的な魅力に恵まれないエレクトラは、夫にも女性らしさを見せないばかりか自らの母性を子供ではなく、弟や殺人計画に向け、子供の代りに心血を注いで大切に〈守り〉、〈育て〉ている。

一方、実際に子供を産み育てたクリュタイメストラは子供たちに愛されない母親ではあるが、彼女の子供たちへの愛は深い。アイギストスとの不義の子供であるオレステスを守るためにアガ멤ノンを殺害し、オレステスを育て、エレクトラに対しても母親らしい愛情を見せ、まだ見ぬ孫の誕生を喜んでいたクリュタイメストラは、しかしながら子供たちからは愛されない母親であった。

また、アイギストスの父性愛もクリュタイメストラの母性愛以上に深く寛容であるにも関わらず、やはり受け入れられることはない。エレクトラはオレステスを守る為にアルゴスから逃亡させ、ポーキスのピラデスに彼を託したが、実はアイギストスがピラデスを買収し、密かにオレステスの養育費を提供していた。また自らがオレステスに刺されたのちも、瀕死の状態でありながら姉弟の逃亡に便宜を図る。こうした父親としての無償の愛もやはり拒絶され、理解

されることはない。この戯曲では母性愛も父性愛も子供たちには通じず、両親と子供たちとの間の溝は深く決して埋まらないまま結末を迎える。ここにはギリシャ悲劇のようなデウス・エクス・マキナは現れず、カタルシスもみられない。

結 び

このように、女性性を発揮する場のないエレクトラと、成長しきれていない子供のようなオレステスの姉弟が、同性愛者のピラデスとともに親殺しの罪を背負いながら向かう未来は、あまりにも不透明で明るい展望の片鱗すら示されていない。こうした3人の若者に行き場のない未来を与えたユルスナールの『エレクトラ』はさまざまな意味で時代を反映しているといえよう。この作品が制作、発表された1940年代は、戦争の影響に翻弄される不安な時代だった。若者が明るい未来を構築することができず、世の中が重苦しい世相で満たされていただけでなく、ユルスナールの個人的な状況もやはり厳しいものであった。

1939年、欧州の戦渦を避けるために、ユルスナールはその二年前に知り合ったアメリカ人女性グレース・フリックの誘いに応じて一時的な滞在のつもりで渡米する。しかし結局その滞在は人生の最後の瞬間まで続くことになった。戦争は長引き、彼女は生活をするために働かなければならなかった。ヨーロッパでは、すでに数冊の作品を出版して新進作家としてデビューしていたユルスナールであったが、アメリカではほとんど無名で作品を発表する場もなく、作家活動は思うようにはいかなかった。結局彼女は大学での文学の教師という職を得るが、慣れない環境、言葉の問題などさまざまな要因が彼女から「書く」意欲を減退させ、いわゆるユルスナールの〈暗黒の10年間〉が続く。彼女が『エレクトラ』を執筆したのは渡米の5年後、41歳の時である。元々はバイセクシュアルであったユルスナールが、アメリカにとどまる決意をしたのは、グレース・フリックを終生の伴侶として共に生きる決断をしたことに他ならない。この決断はヘテロセクシュアリティへの決別であり、またそれは状況的に

も年齢的にも自らの子供を生まないという選択、つまり母親にはならないという決断でもあるといえよう。エレクトラが母親殺しのために綿密に練りあげる策略にかける執念と情熱は、ユルスナール自身の文学作品の制作へのそれを思わせる。ユルスナールはあたかも子供を妊娠、出産、そして養育するかのように自身の作品の熟成に時間をかけ、十分に推敲を重ねた上で上梓する。前掲のエレクトラの台詞は、作家ユルスナールの言葉と呼応してはいまいか。

この世に著作を残すということは子供を残すことと同様に素晴らしいことではありませんか？ こういう時代には子供を残すよりも著作を残す方がずっと良いことのように思います³³。

『エレクトラ』はこういう状況の中から生み出された数少ない作品のうちの一つで、この時代に小説ではなく戯曲という形式がしばしば選択されたのも、厳しい環境にあった彼女の内なる声の間接的な発露の場として適切であったためであると思われる。小説でかき消された声、表に表れない女性の叫びが戯曲でははっきりと響いている。

また彼女の両親との関係性は、エレクトラの人間関係に象徴的に託されている。ユルスナールに多大な文学的な影響と愛情を与えた父ミシェルが、作家としての彼女を作り上げたことは確かであり、26歳のときに父を亡くしてからも彼への愛情と尊敬は生涯続く。一方、彼女の誕生とともに産褥熱のため命を落とした母フェルナンドは、もともと彼女にとっては不在の見知らぬ女性であり、愛情の対象にはならないにもかかわらず、その影はいつまでも彼女につきまとう。父亡き後、ユルスナールは親族との縁を一切断ち切ってアメリカ生活を始める。その姿勢には、母を殺して不確実な未来へ向けて船出をするエレクトラの姿と重なるものがないだろうか。そこには母のように生きるのではなく、母とは異なる厳しいものになるかもしれない自分自身の人生に立ち向かおうとする決意がみてとれる。オレステスから男性の資質である英雄性を排除

し、ピラデスを同性愛者としてエレクトラの周りに配置した構成は、当時の彼女の複雑な心理を反映しているようにもみえる。『エレクトラ』においてオレステスから奪った英雄性を身にまとい、母性とセクシュアリティのはざまで、より困難な道を選ぼうとしているエレクトラの姿に当時のユルスナール自身の姿も重なるが、それは同時に、21世紀の女性たちの置かれた状況を先取りしたもののようにも思える。性的傾向如何に関わらず、子供を持つかどうかの選択、母親になるかどうかの選択に常に向き合わなければならない、現代のエレクトラたちの戦いと苦悩はまだ続いている。

【注】

- 1 Yourcenar, Marguerite, *Électre ou la chute des masques*, in *Théâtre II*, Gallimard, 1971. マルグリット・ユルスナール、『エレクトラ、あるいは仮面の剥落』。以下『エレクトラ』と表記する。本稿の引用はすべてこの版によるもので、引用箇所はページ数のみ記す。邦訳は論者によるもので、引用文中の下線による強調も論者による。なお、ギリシャ悲劇関連の人物名は、便宜上日本で通例であるギリシャ語読みで統一した。
- 2 この作品とギリシャ悲劇の『エレクトラ』の三作品との対比は拙論を参照されたい。“Comparaison entre *L'arbre des tropiques* et trois *Electre* de la tragédie grecque”『ヨーロッパ文学研究』第19号、1996年、甲南女子大学フランス文学会。
- 3 主にヨーロッパにおける『エレクトラ』関連の上演や翻訳、翻案に関して、ピエール・ブリュネルが1500年代から1900年代までの作品のリストを作成している。ここには80余の作品があげられているが、この中で女性作家の手によるものとしてはユルスナールの作品以外には、1881年に出版されたジェニー・コンクラン夫人 Madame Jennie CONKLIN による *Out in God's World or Electra's Story* と1933年のエレヌ・デュ・クードレー Hélène du Coudray の *Electra* が見られるが、共に入手が不可能であったため、今回は参照していない。
Cf. Pierre Brunel, *Le Mythe d'Électre*, Honoré Champion, Paris, 1995, pp. 197-200.
- 4 ユルスナールは本作品を1944年に、アメリカ東北部メイン州のマウント・デザート島で執筆し、1947年に *Le Milieu du siècle* に発表しており、その後、1954年に Plon 社から単行本として出版した。同年10月末に、この作品はパリの Le théâtre des Mathurins で Jean Marchat によるキャスティングと演出で上演され、最終的に

1971年に Gallimard 社より出版された *Théâtre II* に、新たに書き加えられた前書きとともに収録されている。

- 5 この点に関する詳細は拙稿を参照されたい。「エルスナールの戯曲の特質について—『エレクトラ、あるいは仮面の剥落』の中の女性の声—」『関西フランス語フランス文学』第12号、2006年、日本フランス語フランス文学会関西支部、pp. 91-101.
- 6 本稿執筆において参照した版を参考文献中に示す。
- 7 この点に関する先行研究はいくつかあるが、特に参考にしたもののみを参考文献中に記す。
- 8 Yourcenar, Marguerite, *Avant-propos, in Électre ou la chute des masques*, op. cit., pp. 9-22.
彼女は自作解説のみならず、ジロドゥやサルトルらによる既存の翻案を取り上げ、それらの特質を分析して解説を試みている。
- 9 ジロドーの作品もやはりエウリピデスを基にしているが、エレクトラの夫の農夫は庭師と呼ばれるだけで、劇中で重要な役割を果たすものの、固有名詞は与えられていない。
- 10 Clytemnestre: «Et ton père n'était qu'un gros dégoûtant, un simple idiot, une sale brute, moins propre au sortir du bain qu'après une heure d'amour mon amant nu. ...» (P60-61.)
- 11 Électre: «Ils ont tué Dieu, le seul dieu que les enfants comprennent, le dieu à l'image duquel ils imaginent Dieu.»
Oreste: «Puisque je l'avais à peine connu, il était vraiment pour moi plus qu'un homme.» (p. 51.)
- 12 この点における先行研究は参考文献中に示す。cf., Françoise BONALI FIQUET, "Destin et liberté dans *Electre ou la chute des masques de Marguerite Yourcenar*", *Bulletin no. 7, Société Internationale d'Etudes Yourcenariennes*, 1990, p. 99-108. "Du 'Lamento du jardinier' de Giraudoux au dialogue de Théodore et d'Electre dans *Electre ou la chute des masques de Marguerite Yourcenar*", *Bulletin no. 9, Société Internationale d'Etudes Yourcenariennes*, 1991, p. 61-72.
- 13 Électre: «Notre père qui êtes dans la tombe ...»
Oreste: «Que votre volonté soit faite ...»
Électre: «Que votre vengeance arrive ...»
Oreste: «Et pardonnez- nous nos offenses ...»
Électre: «Puisque nous ne pardonnons pas à ceux qui vous ont offensé.» (p. 51.)
- 14 Pylade: Je m'y attendais. Nos vices et nos crimes à nous ne portent jamais de noms,

- et c'est une surprise assez désagréable d'apprendre ceux que le public leur donne. Ce qu'Oreste et toi allez commettre ici s'appelle un matricide. Électre: Je l'appelle un acte de justice. (p. 37.) [...] Tais-toi! Laisse-moi l'illusion que la bataille est pure! (p. 41.) [...] Et nous sommes les purs, les justes, ceux que les poètes plaindront, ceux qui ont en main la vengeance céleste! (p. 42.)
- 15 この点に関する詳細は拙稿を参照されたい。「*Électre ou la chute des masques* におけるセクシュアリティについて」『フランス文学論集』、第14号、甲南女子大学、2001年、pp. 41-51.
- 16 «Ma fille, ma fille Électre ...», «Ma pauvre Électre!», «Es-tu près de ton terme? As-tu peur?» (p. 56.)
- 17 エウリピデス、『エレクトラ』、70頁.
- 18 同上、72-73頁.
- 19 Électre: Tu me plains, n'est-ce pas? Tu plains ta fille? Tu me plains d'avoir vécu dans cette cabane enfumée, d'accoucher sur cette paille, sous ces loques ... Tu as honte de moi, hein, ma mère? ... [...] Laisse-moi toucher ta robe de soie ... Ah! Comme il y a longtemps que je n'ai pas touché de soie, de bonne soie, qui crie quand on la déchire ... (p. 56.)
- 20 Électre: Ton amour pour Oreste ne t'a pas empêchée de lui préférer ton amant, et ta vengeance. [...] Tu as tué mon père dès ta première partie de plaisir avec Égisthe. (p. 57.)
- 21 Clytemnestre: «Ah! Comme j'avais raison de me méfier de tes allées et venues le matin dans les corridors, de tes jupes trop courtes de fillette aux jambes maigres, de tes yeux obstinément baissés, mais quêtant Égisthe! Comme tu me l'as envié, mon amant! [...] Et toi, avec tes pleurs d'hystérique et tes vices de petite fille ... [...] Et j'ai été heureuse, plus heureuse que tu ne le seras jamais sur ton fumier avec ton coq de village ... (pp. 60-61.)
- 22 Électre: Chienne, vache, chamelle! Tais-toi ... Se taira-t-elle? Tais-toi, dis-je ... Ah! Je m'accroche à ton gros cou, je secoue tes grosses joues pour t'empêcher de parler ... [...] Ah! Qu'elle se taise... Je la fais taire avec mes mains ... Je lui renforce les mots dans la gorge ... Qu'ils crèvent comme des bulles ... Ils puent ... Elle me regarde avec sa figure toute rouge ... Ah! Qu'elle se taise! (*ibid.*)
- 23 «faible, facile à plier, fragile» (p. 39.)
- 24 «Ici, dans cette chambre ... Je ne pourrai jamais.» (...) «Je ne pourrai jamais ...» (...)

«Mais, je ne peux pourtant pas la tuer si je la vois de tout près ... (...) Je ne peux pourtant pas la tuer si je me souviens que je suis son enfant.» (...) «Je ne puis tout de même pas tuer la femme qui m'a montré à me servir de ma cuillère et de mon couteau.» (...) «Il ne s'agit pas de son sein ... Il ne s'agit pas de son cœur.» (...) «Il ne s'agit pas d'amour filial, comprends-tu, Électre? ... Même avant son crime, je n'aimais pas ma mère. (...) C'est de cette collection de plaisirs et de dégoûts que je me souviens, et non pas de ma mère.» (pp. 46-48.)

25 Oreste: C'est fini? Tout est fini ... Je ne vois pas de sang ... Mais le visage d'Électre a vieilli ... Électre? Finie, ma mère? [...] Et je n'ai rien entendu, que deux voix de femmes si pareilles l'une à l'autre qu'on eût dit qu'Électre s'insultait elle-même. (p. 63.)

26 Oreste: Par le fils d'Égisthe ... J'ai été dix-huit ans le fils de l'autre, de l'assassiné, de l'homme à barbe rousse égorgé à son retour au foyer. Comme je l'ai haï, ce père qui me forçait à le venger, sous lequel je défailais comme un jeune soldat portant dans la bataille le poids d'un général mort ... Et moi voilà maintenant fils d'Égisthe ... Me voilà forcé de ressembler à quelqu'un d'autre, et pas seulement de lui ressembler, mais de le supporter, et pas seulement de le supporter, mais de le soutenir, de le consoler peut-être ... C'est à cet homme qui je ressemblerai dans vingt ans ... Et j'aurai à porter son histoire, j'aurai à m'amalgamer ses souvenirs ... Et je n'en sortirai jamais, moi, Oreste! (pp. 74-75.)

27 Egisthe: Tu n'as pas besoin de m'aimer. Il me suffit parfaitement de t'aimer comme moi-même.

Oreste: Lâche-moi, voyons! N'essaie pas de me retenir d'un bras autour de mon cou, ne me regarde pas de cet air qui consent à tout parce que je suis ton fils! Tiens! Tiens! ... Je ne m'étais jamais imaginé que j'allais te frapper d'aussi bon cœur!

Egisthe: Qu'as-tu fait? ... Hein? ... Ce couteau Mon pauvre enfant ... (p. 75.)

28 この展開はユルスナールが愛読していたボードレールの『悪の華』に収録されている「死」の中にある126番目の「旅」Le Voyage という長詩を彷彿とさせる。この詩の第七節の最後に次のような表現がある。

なじみのある表現から、われわれはその亡霊の正体を見抜く。

われらのピラデスたちがあそこで僕たちにその腕を差し伸べている。

「お前の心を洗い清めるために、おまえのエレクトラに向かって泳いで行きなさい。」
かつてわれわれがその膝に接吻したあの女が言う。(拙訳)

À l'accent familier nous devinons le spectre;

Nos Pylades là-bas tendent leurs bras vers nous.

«Pour rafraîchir ton cœur nage vers ton Electre!»

Dit celle dont jadis nous baignions les genoux.

Charles Baudelaire, *126 Le Voyage, La mort, Les Fleurs du mal, Œuvres complètes I*, p. 134.

- 29 Oreste: Électre m'aime, non seulement comme une sœur, mais comme la mère à qui elle s'est substituée ... (...) si en moi une espèce de continuité existe encore, s'il y a encore dans mon univers quelque chose de dur et de solide, comme un pal ou comme un pieu, c'est l'amour d'Électre. (p. 71.)

Électre ... Ton bras, Électre ... Ton bras auquel je me suis habitué ... Ne pars pas sans moi ... Ne monte pas sans moi dans cette barque ... «Nous voilà seuls ... Nous voilà tous trois seuls au monde. (p. 75.)» Nous voilà liés, Nous voilà seuls ... Nous voilà libres ... Soutiens-moi ... Viens ... L'épaule de la sœur, le bras de l'ami ... (p. 76.)

- 30 Électre: C'est vrai: j'aime Oreste comme un enfant. (p. 30.)

- 31 Théodore: Et c'est parce que tu aimes Oreste comme un enfant qu'il n'y a pas sur tes genoux un vrai enfant, qui te mord le sein. (p. 30.)

- 32 Électre: Est-ce que ce projet de meurtre n'est pas notre enfant? Est-ce qu'il ne s'est pas formé, invisible à tous, secret partagé, de plus en plus lourd contre mon cœur, jusqu'à ce que tu l'aies entendu remuer en moi? Est-ce que j'en mourrai peut-être pas, couverte de sang comme une accouchée? (p. 31.)

- 33 —Est-ce que laisser des livres sur cette terre, ce n'est pas aussi beau qu'y laisser des enfants?

—Je crois qu'en ce moment, c'est beaucoup mieux d'y laisser des livres que d'y laisser des enfants).

Radioscopie de Jacques Chancel avec Marguerite Yourcenar, Radio France, 1979, Interview avec Bernard Pivot, p. 16.

【先行研究】

BONALI FIQUET, Françoise, "Destin et liberté dans *Electre ou la chute des masques de Marguerite Yourcenar*", *Bulletin no. 7, Société Internationale d'Etudes Yourcenariennes*, 1990, p. 99-108.

ID, Du "*Lamento du jardinier*" d Giraudoux au dialogue de Théodore et d'Electre dans *Electre ou la chute des masques de Marguerite Yourcenar*", *Bulletin no. 9, Société*

Internationale d'Etudes Yourcenariennes, 1991, p. 61-72.

【参考文献】

(ギリシャ悲劇関連)

アイスキュロス、『供養する女たち』『ギリシャ悲劇 I』、呉茂一訳、東京、ちくま文庫、1991年、213-275頁。

エウリピデス、『エレクトラ』『ギリシャ悲劇 IV エウリピデス (下)』、田中美知太郎訳、東京、ちくま文庫、1986年、7-87頁。

サルトル、『サルトル全集 第8巻』、加藤道夫他訳、人文書院、1956年。

ジロドゥ、『ジロドゥ戯曲全集』、鬼頭哲人他訳、白水社、1958年。

セネカ、『悲劇集II』、西洋古典叢書、岩崎務、大西英文、他訳、京都大学学術出版会、1997年。

ソポクレス、『エレクトラ』『ギリシャ悲劇 II』、松平千秋訳、東京、ちくま文庫、1991年、219-300頁。

ジョージ・シュタイナー、『悲劇の死』、貴志哲雄、蜂谷明雄訳、東京、ちくま学芸文庫、1995年。

丹下和彦、『ギリシャ悲劇研究序説』、東海大学出版会、1996年。

Brunel, Pierre, *Le Mythe d'Electre*, Honoré Champion, Paris, 1995.

Carlier, Christophe, Grandjean Philippe, *Les mythes antiques dans le théâtre français du XX^e siècle*, Hatier, 1998.

(女性学及びユルスナール関連)

キャロリーヌ・エリアシェフ、ナタリー・エニック、『だから母と娘はむずかしい』、白水社、2005年。

田嶋陽子、『父の娘と母の娘と』『現代イギリスの女性作家』、東京、勁草書房、1986年。

マリアンヌ・ハーシュ、『母と娘の物語』、寺沢みづほ訳、東京、紀伊国屋書店、1992年。

Allemand Carole, *Marguerite Yourcenar: une écriture en mal de mère*, Imago, 2004.

Charles Baudelaire, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pleiade, Gallimard, 1975.

Brémond, Mireille, «Marguerite Yourcenar et les Atrides: Discours critique et création littéraire» in *Bulletin de la SIEY*, n° 20, décembre 1999, La Flèche, pp. 99-112.

Doré, Pascale, *Yourcenar ou le féminin insoutenable*, Genève, DORZ, 1999.

Meloni, Roberto, «De Clytemnestre ou le crime à Électre ou la chute des masques: de l'aveu du criminel à l'énigme policière», *Bulletin de la SIEY*, n° 25, décembre 2004, pp. 31-45.

Poignault, Rémi, « *Clytemnestre ou le crime, l'épouse* », dans *L'Antiquité dans l'œuvre de Marguerite Yourcenar, Littérature, mythe et histoire*, Bruxelles, Latomus, 1995, tome 2, pp. 148-162.

ID, « *Électre ou la chute des masques*, Un sang nouveau pour le mythe », *Ibid.*, pp. 339-424.

Turettes, Cécile, « *Électre ou la chute des masques: Une nouvelle image des parricides* », *Bulletin de la SIEY*, n° 20, décembre 1999, pp. 113-124.

Waelti-Walters, Jennifer, *Feminist Novelists of the Belle Epoque*, Indiana University Press, 1990.

Summary

Électre de Marguerite Yourcenar

— Entre la sexualité et la maternité —

KUDAWARA-SUZUKI Yasuko

Dans cette pièce qui se base sur *Électre* d'Euripide de la tragédie grecque, nous trouvons quelques points de transformation assez particuliers par rapport aux autres adaptations précédentes. Par exemple, Yourcenar met Électre au centre de l'histoire alors qu' Oreste son frère, héros dans la tragédie grecque, n'agit pas en héros dans cette pièce; il n'exécute pas son acte de justice. Ici c'est Électre seule qui étrangle sa mère de ses propres mains. Il existe dans cette adaptation une rivalité évidente et un contraste saisissant entre la mère et la fille; l'une montre son amour maternel et son bonheur féminin et l'autre refuse d'avoir des enfants et se laisse vivre hors de la sexualité. Sa jalousie et sa haine envers sa mère la conduisent à la matricide. De plus, pour affirmer son identité, Oreste, garçon faible qui s'appuie sur sa sœur, tue son propre père Egiste, bien que celui-ci lui montre beaucoup d'affection.

Ainsi, après leurs matricide et patricide, ces frères et sœurs se dessinent, avec leur ami homosexuel Pylades, un avenir incertain, ambigu et stérile. Cela nous fait penser à la situation de l'auteur à l'époque. Ayant perdu sa mère à sa naissance, elle n'a pas connu le véritable amour maternel. Lors de son adaptation de cette pièce, ayant quitté son pays natal pour fuir la guerre, Yourcenar a décidé de vivre aux Etats-Unis avec Grace Frick, qui est devenue plus tard sa partenaire de vie.

Cette pièce de la tragédie moderne reflète les difficultés diverses concernant la vie et les valeurs de cette femme écrivain mais elles ne sont pas

seulement celles de Yourcenar mais aussi est-ce que ce ne sont pas celles des lecteurs et lectrices actuels et futurs également?